

INFLAMMATION AND REGENERATION
MEMORY*In memory of Dr. Yutaka Mizushima**Nobuyuki Miyasaka**

水島 裕先生を悼んで

宮 坂 信 之*

水島 裕先生は平成20年5月7日に急逝された。本学会が日本炎症学会として発足したときの世話人のお一人であり、さらに本学会に再生医学という新たな学問領域を導入した方でもある。平成12年に政府のミレニアムプロジェクトに再生医学が採択されたことを受けて、日本炎症学会は日本炎症・再生医学会に名称を変更した。これは水島先生の先見の明であり、先生が強力なリーダーシップを発揮して炎症と再生医学の統合を成し遂げたのである。このように先生は当学会の生みの親であるが、学会がようやく軌道に乗り始め、これからというときに逝ってしまった。

水島先生は医学者・薬学者・実業家・政治家・音楽家であり、しかも囲碁七段、将棋七段と多彩な才能をお持ちの方であった。特筆されるのは、早くから医薬研究における産学協同の重要性を強調しておられたことである。そして、自ら設立した聖マリアンナ医大難病治療研究センターのセンター長を務めるかたわら、LTT研究所を設立され、わが国のドラッグデリバリーシステムの研究をリードして来られた。先生が開発にあたられた医薬品としてもっとも有名なものにリポ化製剤があるが、我々は今でもリポ化ステロイド（リメタゾン）やリポ化プロスタグランジン製剤（リプル、パルクス）を臨床の現場で使用し、大いに重宝している。治療抵抗性の関節炎や潰瘍がリポ化製剤の投与によってみるみるうちに軽快していくさまをみると、今更ながら先生の慧眼に驚かされる。まさに“From bench to clinic”を実践された方である。

先生は1995年には参議院議員となられ、2001年には文部科学省の初代大臣政務官を務められ、学・産・官を結ぶ「要」としても活躍をされた。特に、わが国における炎症研究、再生研究、抗加齢研究、さらにはわが国で遅滞している臨床試験の問題点に対するさまざまな提言は、国策において多方面に生かされつつある。

先生が重んじたのは「わかりやすさ」である。それは、先生がみずから編集をして来られ、現在も一大ベストセラーである「今日の治療薬」をみてもわかる。この本は、医師、薬剤師、看護師のバイブルとも言うべき存在になっているが、その最大の理由は、内容がわかりやすいからである。また、先生は長たらしい話は嫌いだった。わかりにくい話をした人に対しては、「要するに、こういうことね」と諭すように話しておられた。この意味において、先生は「民」との結びつきも重要視していたといえよう。すなわち、わが国において学・産・官・民のリンケージを構築した創始者であるといっても過言ではない。

個人的なことに言及すると、私はご子息の昇君（現東京医科歯科大学医学部生理学教授）と

*日本炎症・再生医学会理事長

も深く関係をしている。今から20数年前、自宅の近くの公園で子供を連れて散歩をしているときに、先生とばったり出会った。そのときに先生は、「息子が医科歯科大医学部に入学したから紹介するよ」とすぐ近くのご自宅に気軽に案内してくださった。その後、昇君が医学部4年生のときに学生仲間を引き連れて私のところに抄読会をやりたいと来たので、*New England Journal of Medicine* のCPCと一緒にやった。これが契機になったのか、彼は私の主催していた第一内科に入局。臨床研修、さらには大学院を終え、その後は基礎研究に転進、今ではAutophagyの世界的な大家になっている。昇君が教授選考のときは水島先生もかなり気になっていたらしい。しかし、私も立場上、余り詳しいお話はできず、沈黙を守っていた。水島先生もそれとなく聞きたそうにはしてらしたが、じっと我慢をしておられたらしい。私が、「昇君は先生に似ず性格がいいですね」と悪口(?)をいっても、嬉しそうにしておられた。お嬢様のことと並んで、お子様のことは可愛くて仕方がなかったようである。

その先生ももはやいない。日本炎症・再生医学会は、平成21年の炎症研究振興会の解散を前に新たな組織に変身するための努力を始めているところである。先生には、あの世から当学会が見事にモデルチェンジするところを見ていただきたい。先生のご冥福を心よりお祈りする。合掌。